

第五十七章 萬國工業會議

米國機械學會の工學博士エルマー・エー・スペリー氏の熱心なる主張により萬國工業會議を日本に於て開催したとの議があり、大正十四年三月我が東京帝國大學の教授加茂正雄氏に宛て「米國機械學會の役員は全員一致を以て今後五年以内に萬國工業會議を日本に於て開催することに關して國內の各學會に勧誘せんと欲するを以て關係要路と協議の上回答ありたき」旨を通じて來た。我國工業關係の九團體を以て組織し、男爵古市公威氏會長とし男爵斯波忠三郎氏を副會長とせる社團法人工學會は、此の會の開催が日米兩國の技術者を接近せしめ、將來協力の目的を達せしむるであらうし、又彼地有識者が渡日して親しく日本の進歩を見聞することは兩國民間の理解を増進せしむる捷徑であると考へ、大體に於て其の主催に當る方針を決し、一方スペリー氏に對して萬國工業會議の規約及範圍に就きて交渉すると共に四月十五日古市、斯波、加茂の三博士は技術者出身にして米國に友人多き當俱樂部の理事長たる團博士に對し、特に會議開催に付協力を求めて來た。團理事長は此の催には衷心より賛成して之を承諾し、越へて同月二十七日商工大臣野田卯太郎氏宛に古市工學會長以下十二學會長等の名を以て來る十八年を期して此の會を開くべきを以て、經費其の他の點に就きて相當援助ありたき旨を上申した。商工省にては五月二十二日工務局長より當俱樂部の意見の開陳を要求して來り當俱樂部は理事長の名を以て次の如く答申した。

拜復五月二十二日附工場第三七六三號ヲ以テ本邦ニ於テ萬國工業會議開催ノ件ニ關シ御照會ノ件拜見致候處右八各學會一致ノ希望ニテ我工業界ノ現状ヲ紹介スルト同時ニ廣ク萬國ノ智識ヲ收受シ内外交歡ノ内ニ相互ノ了解ヲ得テ本邦斯界發展ノ機運ヲ促進シ兼テ國際上ノ關係ヲ親密ニスルコトハ頗ル機宜ニ通シタル舉ト被存候テ全然御趣意ニ賛成ニ候間當局ニ於テハ右希望ヲ貫徹致候様御配慮ヲ被リ度茲ニ御回答旁得貴意候 敬具

大正十四年六月九日

社團法人日本工業俱樂部
理事長 團琢磨

商工省工務局長 宮内國太郎殿

我が政府に於ては數年後の支出を豫約するに難色があつたが、米國に於てはスペリー博士等熱心に其の實現を希望し、遂に大統領フーヴァー氏を動かすに至り、十五年六月特に古市、斯波、團の三博士に宛て米國五大工業會は一致を以て萬國工業會議を日本に開くことに協賛する旨を打電するに至った。斯かる内外の情勢の結果、大正十五年十月時の若槻内閣總理大臣は工學會の理事並に學會實業界の有力者二十餘名を會し、政府に協賛の意あること並に十五萬圓以内の補助金を政府に於て支出すべき旨を發表した。是に於て昭和二年一月先づ萬國工業會議開催準備委員會を組織することとなり、日本工學會の構成分子たる日本鑛學會、日本製鋼協會、土木學會、造船協會、建築學會、工業化學會、衛生工業協會、電氣學會、電信電話學會、機械學會、照明學會、火兵學會の幹部を始め各方面の主なる人と並に諸團體の代表者を以てその委員となし、工學會理事長男爵古市公威氏を委員長に推し、同年三月第一回、九月第二回準備委員會を開催して、萬國工業會議規則を制定し、尋で萬國工業會議に關する第一次豫告書を廣く内地及諸外國に配布して、茲に昭和四年十月下旬より二週間萬國工業會議を東京に開催することを宣言した。

準備工作の進捗するに従ひ新に萬國工業會議評議員會を設け、凡て重要な事項は此の評議員會に於て決定することとなった。評議員は始め三百七十名を以て組織されたが後には五百名の多數に上つた。斯くて昭和三年十月二十八日第一回評議員會に於て諸規定を議定し、會長には男爵古市公威氏を、副會長には當俱樂部理事長男爵團琢磨氏、男爵斯波忠三郎氏、商工次官男爵四篠隆英氏及び各學會の會長を推すこととなった。

是より先き秩父宮雍仁親王殿下には總裁たることを聽許あらせられ、昭和三年七月二十七日總裁奉戴會を當俱樂部に催し、名譽會長田中内閣總理大臣以下役員一同殿下を迎へ奉り、殿下より『此の會議によって我が工業界が直接列國の權威者を迎へ得て、我國の文化及國情の真相を列國人に理解せしむることは國際親善の上に好き機會である。十分準備を整へて參加諸國の期待に背かないやうにありたい』との令旨を賜った。是より名譽役員及名譽會員の推薦、論文發表、期間、見學旅行等の基礎的事項を審議したる上、我國空前の會議たる萬國工業會議は昭和四年十月二十九日東京日比谷公會堂に於て其の開會式を擧ぐることとなった。是の日總裁秩父宮殿下御臨場あつて令旨を賜はり、名譽會長内閣總理大臣濱口雄幸氏、會長男爵古市公威氏及來會々員の演説があつたが、殿下の令旨は我國の工業界及國際間の産業通商の趨勢を述べられ本會の齎すべき効果に及ぼされた。

來會者の爲に早くも遊覽旅行の一日程が作られ十月二十五日より日光、箱根に赴きたる團體あり、二十八日夜は帝國ホテルに於て會長の接見あり、二十九日は開會式後總會を開き議事規則の議定各部委員長の選任等を終へ、夜總理大臣官邸に於て濱口總理の接見あり、翌三十日より十一月一日まで十二の部會は貴衆兩院の議事堂に分れて開催され、二日見學旅行、三日觀光旅行、四日より六日まで部會會員は其の間種々の歡迎の催に忙殺され、七日衆議院議事堂に於て總會及閉會式を行つて會議は無事に終了した。此の外來會員中ラヂオ放送及東京帝國大學工學部講堂、當俱樂部、東京大阪朝日新聞社朝日講堂、神戸縣會議事堂に於て講演を爲した者があり、又た京都奈良の觀光、さては臺灣朝鮮、滿洲にまで旅行した者もあつた。此の會議と同時に萬國動力會議も東京に開かれた。

工業會議は開會數日に過ぎなかつたものゝ、規模の大なりしことは其の名の示す如く全く世界的であつて、其の影響の大なりしことも亦世界的であつた。會員は約四千五百名特に海外會員九百八十五名中來朝せしもの總計六百七十一名の多きに達した。別して米国の如きは代表及正會員百六十名及び是等の同伴者たる客員百三十名計二百九十八名の來朝を見たのである。其の参加の國々は歐米諸國を始めとして四十二ヶ國に及んで居るし、研究所、學會、協會、試験所及大學等團體の代表を送つて参加せしもの二百三十を算へた。

此の會議は工業一般、工業科學、精密機械、航空及工業材料、建築及構造工學、土木、鐵道及運輸、通信、動力、電氣工學及照明、機械工學、冷凍、紡績及自動車、造船及船用機關、化學工業、燃料及燃燒、鑛山及冶金、科學的管理の十二部會に分たれ、之に提出せられたる論文數は八百十三篇に上つた。この四十二ヶ國よりの來朝者が其の國又は世界に於ける第一流の學者を網羅して居たことは此の會議の最も光彩を放つた所であり、又此の會議をして最も効果を大ならしめたものであつた。來會の會員に對し各方面に於て工場、造船所、都市港灣の設備、古美術を開放し、風景古蹟の遊覽にあらゆる便宜を提供し、鐵道省は無賃乗車券を發行し、又各方面より十日間九十二回の招待があり、萬國工業會議の頭文字 W、E、C をウヱー、イート、コンスタントリーと洒落れた程御馳走責めに殆ど應接に違がなく、空前の歡待に來會者の満足の様は英國のウエイキハム氏が『日本は五六百の大使を全世界に遣したと同様の効果を収めた』と評して居たことにも其の一端を窺ひ知られる。

此の會議の經費四十九萬圓、政府補助金十五萬圓の外民間寄附金二十七萬圓に上り、其の寄附金募集に當り當俱樂部與つて力あるのみならず、會議の準備時代より事務室を提供して事務に協力し、會議の庶務、會計は當俱樂部の主事膳桂之助氏之に當り、俱樂部の機關を動員して萬般の準備を整へ、十日間の會議及び見學、時間正確、進退一絲亂れず、殊に各所の見學に於ては往くに自動車があり、見學を終へれば御馳走があり、内外の會員一の混雜もなく、満足の中に日程を進行せしめた。この會議の進行及論文の編輯に就いては農商務省の吉野信次氏、東京工科大学の佐野秀之助氏各之に當り、古河合名の福地信世氏専ら經畫萬端に與つて會議の進行に遺憾なからしめた。後高松宮殿下獨逸に御巡遊の時、獨逸にても日本の如く斯く組織的な工業會議は出來難しと言はれて面目を施されたと、古市會長と斯波副會長が宮家に招かれた時御話があつたといふ。又當俱樂部は十月三十日夜日本經濟聯盟會と聯合して歡迎の夜會を開いた。當夜會する者内外の紳士淑女堂に隘れ、肩々相摩するの盛況で、各得意の舞踏に更の深くるをも知らぬ有様であつた。翌十一月一日の當俱樂部に於ける講演會は左の獨、米、英三國の博士出席し次の題目に付各熱辯を揮つた。

科學及工業博物館に就て	オスカー・フォン・ミラー博士
米國に於ける産業調査組織	エム・ダブリュー・アレキサンダー博士
英國に於ける淨水供給	ダブリュー・シー・エス・ピニー博士